

大沢の里古民家

わさびは日本の固有種

わさび栽培の歴史

「わさびは日本の固有種なんです。」岐阜大学の山根京子准教授は元氣よく答えた。山根先生は日本でたった一人のわさびの専門家だ、わさびがあると聞けば、日本列島のどこでも山に分け入り、自分の眼で確認し、了解を得て採取もする。日本だけではなく、中国雲南省の山奥にそれと似た野草があると聞くと単身調査に向かう。その結果わさび独特の辛味は、日本の個体にしかない特徴であることが科学的に証明された。

だが栽培種としてのわさびの将来には危機が訪れていると山根先生は指摘する。

「元々わさびは、六世紀の出雲国風土記にも記載があるほど古くから日本人には利用されており、日本列島の至る所に自生（在来種）していたものなんです。」

だが大きく見栄えのよい栽培種が開発されると急速に広まり、かつて日本列島の至る所にあった在来種は、僅か数種類の栽培種に置き換えられてしまったという。このわさび田でも、かつては根の大きな栽培種の苗を買って移植していたことがあるそうだ。今残っている品種はなんだろうか？ 山根先生はこのわさびのDNA分析を行ってみた。その結果三鷹大沢わさびは驚くことに、いまや列島にほとんどない在来種のひとつであることが解った。「伊勢から持ち込まれたという箕輪家の伝承とDNA分析の結果は符号しているのかもしれない。ただし伊勢にあった在来種はすでに絶滅したと見られます。」つまり現在三鷹大沢に残っているわさびは、百五十年以上



箕輪清さん



山根京子准教授



「湧き水がどんどん少なくなってわさび農家も諦めざるを得なくなりましたよ。」箕輪清さん（昭和二十七年（一九五二年生まれ）は大勢のボランティアメンバーと一緒にわさび田保全の作業をしながらそう呟いた。

「親父（箕輪一二三さん故人 大正十二（一九二三）年生まれ）がここですつとわさび田をやっていました。私もこの手伝いをやらされていました。わさびなんか、都内では珍しかったので、テレビ局が何度も取材に来ていましたね。父は歴史が好きなんです。でも湧き水が減って先祖がやっていたようなことも十分にはできなくなって、わさび栽培は諦めざるを得なくなりましたわね。」

「祖母の代にこの家とは別に母屋を作ったので、この古民家は作業小屋のような感じで利用していました。だから比較的そのまんまの形で残ったんですね。でも解体前は相当なボロ屋でしたよ。」

雑草を抜く手を休め、汗をぬぐいながら、清さんは笑顔を向けた。

箕輪家がここでわさび田を始めたのは、百五十年以上前の江戸時代のことだ。わさび栽培を創業した小林宮吉（文化・文政頃の生まれ、後に箕輪政右衛門と改姓）は仕官のために上った江戸の町で、握り寿司がブームとなり、その毒消しとしてわさびの需要が急増していることを知っていた。江戸市中で箕輪家の娘フデと仲良くなり、大沢村に訪れた政右衛門は、この地の豊富な



箕輪宗一郎さん

前に六代前の政右衛門が伊勢から移植したものが、そのまま残されていると可能性が高いとのことである。では途中で導入していたという栽培種はどうして残っていないのだろうか？ 山根先生は推測する。

「最近の湧水の枯渇によって悪化した水環境に耐え得たのは、元々のわさびだけだったのかもしれないね。」

しかし、大きく見栄えのするわさびを導入した後も、在来のわさびを作り続けた理由は何だろうか？ わさび栽培を実際に行っていた経験のある箕輪宗一郎さん（大正十二（一九二三）年生まれ、大沢在住）に聞いてみた。宗一郎さんは「小さくても味が良かったからね。」と答えてくれた。

わさび田を含む国分寺崖線一帯は、現在では緑地保全地域として、東京都が用地を取得し、三鷹市と共に崖線一帯の環境保全が進められているそうだ。

山根先生は年に何度も保全活動の指導のため、このわさび田に来る。「都心からそれほど遠くない三鷹に、こんなわさびが残されているのは「奇跡」としかいいようがない」存在なのだという。いつの日かわさび田に豊富な湧水が戻り、三鷹大沢わさびの復活を、多くの人が待ち望んでいる。



湧水を見て驚いた。この湧き水でわさびが育てられるかもしれない。政右衛門の脳裏には、故郷に近い伊勢神宮の前を流れる五十鈴川に自生していたわさびが印象に残っていた。

政右衛門は早速伊勢からわさびを取り寄せ、大沢に移植したという。一方で江戸市中に販路を開拓し、伊豆より近く小ぶりだが味の良いわさびとして珍重されていたそうだ。

大沢の里古民家には「箕輪山葵園」の文字が染め抜かれた半纏が保存されている。「源」の字があることから四代目の源清さんが作ったものらしい。箕輪山葵のブランド化が進んでいたことがわかる貴重な資料だ。箕輪一家やその周辺の人たちによって、武蔵野台地の湧水を利用したわさび栽培は拡大し、府中や調布、また埼玉県の新座市にも広がっていた。また築地市場ができる前に神田に市場があった頃から「箕輪山葵店」を開き、わさびを広く卸し販売していたそうだ。

昭和の後期になり、市街地化の進行に伴う湧水量の激減により、わさび生産は行われなくなった。百年以上続けられていたわさび田も、しばらく放置されていた。だがこの農家を「大沢の里古民家」として復元整備するなかで、このわさび田に再び注目が集まった。市で主催していた講座を通じ、わさびの面白さに惹きつけられた多くの市民ボランティアによって、わさび田の復活作業が始まっている。

「定年で勤めも終えたのでね、わさびや古民家のことは、市役所の人いろいろ尋ねられて困ってしまいますけど、聞かれると思いで出すこともあるので、今は参加しています。」

寡黙な清さんだが、わさびの事にもっと詳しい人がいると、親戚の方への聞き取り調査を仲介されたり、古民家で体験学習ボランティアにも積極的に参加されているそうだ。

「ボランティアのみなさんがわさび田保全の活動に参加されていらっしやるのを見ると感謝の気持ちでいっぱいです。でももうちょっと親父の言うことも聞いておけばよかったなあ。」

